

研究ノート

下総台地に鎮座する神社の呪術的配置形象 — 下総三山七年祭神社, 藤原時平神社, 天満宮等 の位置関係に関する予備的検討 —

松下博宣*

要旨: 本研究は、下総台地に鎮座する下総七年祭神社、藤原時平神社、天満宮等の配置形象に含意される意味を探索的に特定することである。下総三山の七年祭りに参加する9社、八千代市の時平神社4社、ならびに下総地域に点在する天満宮、天神社を実際に訪れ、神社の位置をGoogleマップ上にプロットして、神社群の位置（緯度、経度、標高）を特定し、各神社の由緒書を収集し、関連する史料を分析した。その結果、①三山七年祭神社パラレログラム、②八千代時平系神社群トライアングル、③天満宮ラインA、B、④下総道真信仰系レクタングルという神社の呪術的配置形象が空間的に構成されていることが明らかになった。本研究の発見にもとづき、これらの神社の配置形象が、同地域に特有の水害リスクを暗黙的に示唆する可能性について論考した。

キーワード: 藤原時平, 菅原道真, 天満宮, 呪術, 下総三山七年祭, 水害リスク

Incantational Arrangement of Shrines on the Hokuso Plateau: A Preliminary Study on the Locations of Shimousa Sanzan Shichinensai Shrines, Fujiwara no Tokihira Shrines, Tenmangu Shrines, etc.

Hironobu MATSUSHITA*

Abstract: This preliminary study conducts an exploratory investigation of the implied meanings in the arrangement of the Shimousa Miyama Shichinensai, Fujiwara no Tokihira, Tenmangu, and other shrines located on the Shimousa Plateau. I visited nine shrines participating in the Seven Year Festival in Shimousa Sanzan, four Tokihira Shrines in Yachiyo City, and Tenmangu Shrines and Tenjin Shrines scattered in the Shimousa area. I then plotted the locations of the shrines on Google Maps, identified the locations (latitude, longitude, and elevation) of the targeted shrines, collected the historical records of each shrine, and analyzed the related historical documents. The results suggest that the four configuration figures are spatially structured as follows: (1) the parallelogram of the Sanzan Shichinensai shrines; (2) the triangle of the Yachiyo Tokihira shrines; (3) the Tenmangu shrine lines A and B; and (4) the rectangle of the Shimousa Shichinensai shrines. Based on these findings, the possibility that the arrangement of these images implicitly indicates the risk of flood damage peculiar to the area is discussed.

Keywords: Fujiwara no Tokihira, Sugawara no Michizane, Tenmangu, incantation, Seven Year Festival, Shimousa Sanzan, Flood risk

1. はじめに

人間が生きている空間は地球上あらゆる陸地に拡がっており、歴史的な出来事の履歴も無限である。それらに付与される意味も無限である。よって、研究の対象とする地域やテーマを限定する必要が生じる。本研究は、空間的には千葉県の下総地域を取り上げ、歴史的な登場人物としては、藤原時平、菅原道真を、生きる術としては「呪術」を、そして、それらが複合する場として、彼らに関わりが深い神社に注目する。このように限定された空間と文脈を分析することによって、本稿では、この地域特有の水害リスクに関する示唆を発掘してみよう。

呪術とは、超自然的な存在に訴えることによって、良縁成就、安産成就、病気平癒、発育増進、商売繁盛、交通安全、地域安全、鎮護国家などの望ましいことの実現を手に入れようとする行為である。人類学・民族学者のFrazer (1998) は、呪術が超自然的霊格を統御することによって目的を達成しようとするのに対して、宗教は霊格に対する懇願であると述べ、呪術と宗教を明確に区分した。呪術が成立する構造の基底には、コスモロジー（宇宙観）の存在がある。文化人類学者の上田 (2010) は、Frazer (1998) の言説を敷衍したうえで、たくさんのシンボルによって構成された儀礼が伝えるメッセージは究極的のところ、その文化の世界観、コスモロジー（宇宙観）である、とする。機能面に注目すれば、呪術は、霊的存在を強制したり脅迫したりして、さまざまな現象をコントロールしようとする（上田 2010：157）営みである。

今日、天満宮や天神は学問成就の切なる祈願の場として、全国的に信仰の対象となっている。天満宮や天神は、「学問の神様」とされる菅原道真を祭神とする神社である。「学問の神様」=天神様=菅原道真という超自然的な存在に祈ることによって、受験合格や学問成就、あるいはそれらの延長線上に夢想する人生の成功といった目的を達成しようとすることは、Frazerや上田の言説によれば、呪術的行為にほかならない。また、これらの日常風景の傍らで、週刊少年ジャンプ（集英社）にて2018年から連載が続いている「呪術廻戦」も人気を博している。この「呪術廻戦」は、人間の負の感情から生まれる化け物・呪霊を、呪術を使って

祓う呪術師の闘いを描いたダークファンタジー・バトル漫画である。こうように、現代人として、主知主義的科学観のみに依拠して生きているわけではなく、呪術的な生活観に依存して生きている側面があることは決して否定できない。

さて、菅原道真を祀る天満宮は総本社である太宰府天満宮（福岡県太宰市）と北野天満宮（京都市）に加え、防府天満宮（山口県防府市）の3大天満宮をはじめ、全国で1万2,000社を数える。東京都内に鎮座する湯島天神の正月3が日の参拝者数だけをカウントしても25万人から30万人にまで達する（湯島天神, 2021）。しかしながら、菅原道真が「学問の神様」として信仰の対象となったのは後世のことであり、天満宮は、菅原道真の「怨霊」を鎮魂し、祟りを鎮める社という性格が強かったのである。天台座主慈円によって13世紀初頭にまとめられた「愚管抄」では、怨霊とは、現実世界において果たせなかった復讐を、冥界において果たすために登場する存在であって、相手を攻撃するだけではなく世の乱れをも引き起こす存在だと記している（山田 2014：38）。

菅原道真は、宇多天皇に重用された文人政治家であり、異例の出世を遂げつつあったが、ある日突然、京都から追放された。菅原道真が怨霊になった直接的な背景は、大宰府への左遷であった。延喜7年（901年）に起こった、いわゆる「昌泰の変」である。滝川（2019：219）によると、道真は儒家としては異例の出世によって、妬まれ、誹謗され、また、宇田法皇の側近として醍醐天皇側と対立する存在としてとらえられていた。道真の左遷が藤原時平の主導によるというのはほぼ通説であるとされている。

後醍醐天皇の皇太子保明（やすあきら）親王が21歳の若さで亡くなったことを日本記略は、「世を挙げていわく、菅師靈魂宿忿のなすところなり」と記している。また、延長8年（930年）の内裏への落雷は人々を恐怖に陥れた（山田, 2014：66）。雷は清涼殿を直撃して、大納言藤原清貫は雷に貫かれて即死し、右中弁平希世は顔が焼けただれて無残な姿で死亡した。北野聖廟縁起は「これすなわち、天満大自在天人の十六万八千の眷属の中の第三の使者火雷火毒王の仕業なり」と記し、この死者を出した宮中落雷火災を菅原道真の怨霊の仕業に帰している。そして、一条天皇は、道真の祟りを鎮めようとして、正暦4年（993年）に、亡き道真に左大臣正

一位、太政大臣の官位を贈っている。京都北野は平安京の裏鬼門（西北）に位置していて、古来、火雷神と地主神が祀られていた土地である。その地に天曆元年（947年）村上天皇の治世に、道真の怨霊を鎮めるために北野天満宮が創建された。北野天満宮創設の後の時代にも、引き続き道真の怨霊は恐れられ、北野天満宮大神、日本太上威徳天等の神格が与えられた。菅原道真の怨霊が、前述した宮中落雷火災の凄惨なイメージとともに、京都北野の地にもともとあった火雷神と結びつき、「天満大自在天神」とも称された。このような経緯を経て、菅原道真の怨霊信仰が、一般に「天神信仰」と呼ばれるようになった（竹居 2002：25）。

以上のような変遷を経て、菅原道真に対する信仰は、徐々に怨霊から地域安全、国家鎮護のための守護神、学問の神様へと、その性質が操作され、転換されてゆくこととなった。現代においては、菅原道真の怨霊というイメージは希釈化され、一般的には「学問の神様」として、受験合格や学問成就の呪術的行為の対象になっている。

道真の左遷を主導したとされる藤原時平は、いかなる人物だったのだろうか。藤原時平は藤原北家、摂政関白太政大臣・藤原基経の長男である。正二位・左大臣、贈正一位・太政大臣という重要な官職を歴任し、基経の嫡男として若くして栄達した。そして、醍醐天皇が即位すると左大臣として朝廷貴族の頂点に立った。しかし、道真左遷の張本人とされたことから、天神信仰が広まった後世の説話や芸能では讒臣・極悪人として描かれた（南里，1991）。時平は延喜9年（909年）に39歳で死去。『扶桑略記』や『浄蔵伝』では、時平の若死は、道真の怨霊によると記され、以降はもっぱらその見解が取られるようになった（笠井，1964）。たとえば、北野天神縁起絵巻や御伽草子、歌舞伎『天満菜種御供』など、時平は道真を主人公とする文芸諸作品では、藤原時平は菅原道真を讒言によって陥れ、左遷に追いやった悪役として扱われている。

さて、本研究は、下総台地の一角に建立された諸神社の配置形象を考察することであるが、学術的な先行研究は多くはない。神社の立地を研究する先行研究では、景観生態学の視点から地形的特徴に注目しているものが見られる。たとえば、藤田・熊谷（2007）は、地形との係わり合いを求め

た立体的地形的特徴では、神社が斜面地部に沿って線上に分布し、寺院が斜面の下部の低地上や上部の台地上に集塊性を持って分布する特徴を報告している。また、神社が社叢の位置や参道の位置など地形を考慮して創設されたことや河川・海・樹木を神体としている神社も存在すること（東京都神社庁1986；上田ら，2005；鎌田，2000）などが指摘されている。また、服部・二井（2012）は、洪水常襲地における神社の立地特性として、浸水頻度の高い集落では、川と集落との間に神社を設置することが優先されることを明らかにしている。2011年の東日本大震災の際に発生した津波災害を実証的に分析した複数の研究は、津波被害に遭った地域の多くの神社が津波浸水線に沿う位置に建立されていたことを報告している（尾崎・金井，2012；高世ら，2012；鈴木ら，2012；高田ら，2012）。これらの研究では、多くの人々に災厄をもたらした津波を怨霊といった反証不可能命題に帰属させるのではない。反証不可能命題に原因や結果を帰属させてしまっては科学たりえないのである。あくまで神社の配置を、後世の人々に「津波のメッセージ」として危険性を知らしめる「警告」を示すものとして合理的にとらえている。

2. 目的

本研究の目的は、下総三山の七年祭りに参加する9社、八千代市の時平神社4社、ならびに下総地域に点在する天満宮等の位置と相互関係を特定して、それらの呪術的配置形象に埋め込まれた呪術的意味の一端を明らかにすることである。

3. 方法

フィールドワークとして、下総三山の七年祭りに参加する9社、八千代市の時平神社4社、ならびに下総地域に点在する天満宮、天神社等を実際に訪れ、(1) 神社の位置をGoogleマップ上にプロットして、神社群の位置（緯度と経度）を特定し、(2) 各神社の由緒書を収集し、(3) 関連する現存する史料を分析し、これらの作業を帰納的に積み上げ、対象神社等の呪術的配置形象に関して論考を加えた。神社の標高は、地理院地図（電子国土web）で当該地点を確認のうえ計測した。洪水等によってもたらされる印旛沼、東京湾の洪水時に予測される浸水範

圏を表示するものについては、アメリカ合衆国 Federal Emergency Management Agency（連邦緊急事態管理庁）によって開発された floodmaps を用いた。

4. 結 果

上記の(1)の結果、つまり、調査対象神社の創建年、所在地の緯度・経度、標高、所在地住所は表1の通りであった。

5. 考 察

下総台地は、千葉県北部一帯にひろがる台地である。下総台地のある房総の地には古代から近世まで牧の歴史があった。『延喜式』には、この地域に7つの馬の牧場と2つの牛の牧場があったことが記されている。鎌倉時代から戦国時代にかけては、軍馬供給を背景に千葉氏一族が房総の地を支配した。

表1：各神社の創建年、位置、標高、所在地

神社名	創建年	緯度	経度	標高	所在地
三山七年祭り神社					
二宮神社	弘仁年間（810年～823年）	35.703707	140.05188	27.7	千葉県船橋市三山5丁目20-1
菊田神社	弘仁年間（西暦810年代）	35.686424	140.02722	6.4	千葉県習志野市津田沼3丁目2-5
高津比咩神社	明応元年（1492年）	35.716954	140.09343	23.9	千葉県八千代市高津294
八王子神社	大同2年（西暦807年）	35.746706	140.06863	22.6	千葉県船橋市古和釜町161
子安神社	延暦年間（782年～806年）	35.671006	140.08038	24.3	千葉県千葉市花見川区畑町2093
子守神社	不明	35.665426	140.05385	6.1	千葉県千葉市花見川区幕張町2丁目990
大原大宮神社	天治元年（1124年）	35.689591	140.06888	24	千葉県習志野市実籾1丁目30-1
大和田時平神社	慶長15年（1610年）	35.720941	140.10779	22.8	千葉県八千代市大和田793
高津比咩神社	明応元年（1492年）	35.715541	140.09437	24.1	千葉県八千代市高津294
八千代市時平神社四社					
大和田時平神社	慶長15年（1610年）	35.720941	140.10779	22.8	千葉県八千代市大和田793
萱田時平神社	元和元年（1615年）	35.718059	140.11121	24.5	千葉県八千代市萱田町947（三角点）
萱田下時平神社	不明	35.735319	140.1118	15.2	千葉県八千代市萱田町1104
小板橋時平神社	1941年	35.715216	140.11078	24.5	千葉県八千代市大和田311（三角点）
天満宮					
白井天満宮	創建年不明	35.804523	140.05908	19.9	千葉県白井市根
米本天満宮	米本神社内に鎮座 創建年不明	35.748754	140.11972	25.5	千葉県八千代市米本
小池天満宮	創建年不明	35.781683	140.0955	16.5	千葉県八千代市小池
白井田天満宮	創建年不明	35.743208	140.18785	27.7	千葉県佐倉市白井田1070-1
寺崎天満宮	創建年不明	35.715602	140.21357	29.1	千葉県佐倉市寺崎2854
桑納天満宮	創建年不明	35.759115	140.09928	23.2	千葉県八千代市桑納398
宮ノ台天満宮	創建年不明	35.738772	140.14425	21.6	千葉県佐倉市宮ノ台5丁目16-3
桑橋天満宮	熊野神社内に鎮座（天満宮創建年不明）	35.757253	140.0954	23.3	千葉県八千代市桑橋
北総天満宮	北総来迎寺天満宮は健治2年（1276年）創建	35.612611	140.12671	4.3	千葉県千葉市中央区道場北1丁目2-3
千葉天神	千葉神社境内。寿永元年（1182年）9月25日勧請	35.364287	140.07254	5.2	千葉県千葉市中央区院内1丁目17-4
馬込天満宮	延宝2年（1774年）創建	35.441375	139.59457	24.2	千葉県船橋市馬込西2丁目18-9
行田天満宮	創建年不明	35.718846	139.97554	18.4	千葉県船橋市山手3丁目12
菅原神社	千葉介親胤の勧請で、保元2年（1157年）建立	35.706965	140.23653	25.3	千葉県佐倉市石川164
葛飾天満宮	葛飾八幡宮境内。八幡宮は寛平年間（889年～898年）創建	35.724228	139.93173	3.9	千葉縣市川市八幡4丁目2
昆陽神社	弘化3年（1846年）創建	35.661158	140.05498	8.1	千葉県千葉市花見川区幕張町4丁目803

これらの牧場は徳川家康の関東入国以降さらに整備された。現在の下総台地は、その安定した地層と東京都心に近い地の利のため、近年では都市化が急速に進行している。関東平野の中では確認されている活断層が比較的少なく、岩盤が強固とされることから宅地開発事業も盛んに行われている。

5.1. 藤原時平やその子孫を祭神として祀る神社

現在まで連綿と続く菅原道真を祀る天満宮信仰から隠れるように、あるいは対抗するように、「時平悪役説」を真っ向から否定し、藤原時平を神として祀ってきた稀有な地域が千葉県の下総台地の一角に存在している。それは、下総台地に位置する千葉市、船橋市、習志野市、八千代市をまたぐ地域である。藤原時平、時平の子供、子孫を祭神として祀る神社は以下である。

- ・二宮神社（船橋市三山）
- ・菊田神社（習志野市津田沼）
- ・高津比咩神社（八千代市大和田新田）明応元年（1492年）創建
- ・八王子神社（船橋市古和釜町）大同2年（西暦807年）創建
- ・大和田時平神社（八千代市大和田）慶長15年（1610年）創建
- ・萱田時平神社（八千代市萱田町）元和元年（1615）創建
- ・萱田下時平神社（八千代市萱田町）創建年不明
- ・小板橋時平神社（八千代市大和田）昭和16年（1941年）創建

時平の名が冠せられた神社については後述するとし、まず、上記のそれら以外の神社の来歴を一瞥してみよう。二宮神社の現在の社殿は安永年間（1772年～1781年）に再建されたものであり、その祭神は、藤原時平である。習志野市津田沼にある菊田神社が公開している公式ホームページ（2022）に記載されている伝承によると、時平の子孫にあたる藤原師経が治承4年（1180年）下総国へ流罪になった際に、到着地に建立された神社である。流罪となった師経が、海路暴風に遭遇し、久々田（くぐた；現在の習志野市津田沼）に流れ着いた。後に菊田神社となるこの海岸に近い地で、久々田大明神と時平を含む祖先の霊を祀り、その後師経は二宮神社を深く

信仰し、時平とともに二宮神社に祀られたという伝承である。

高津姫神社の主祭神は宗像三女神の一柱である多岐都比売命とされているが、当社が鎮座する高津地域一帯では、多岐都比売（タギツヒメ）と高津比咩（タカツヒメ）は発音が似ていることから、多岐都比売は高津比咩として受けとめられている。これを裏づけるように、高津比咩神社に隣接する高津観音寺に伝えられている「高津観音堂本尊縁起」には次のような記述が見える。すなわち、「平安前期、菅原道真を追放した祟りで亡くなった藤原時平の妻と第五息女高津姫は、東下りをして下総の久々田に漂流した時、舟が石となった。姫は三山から高津の地に落ち着き、花の洛の昔を偲び亡父を慕いながら当地で一生を終えた。彼女が守り本尊としていたのが十一面観世音菩薩で、高津観音寺に安置された。高津姫は高津比咩神社に祀られ、当地の産神様となった」。八王子神社は、「七年祭り」において、末っ子



写真1：二宮神社（2021年3月11日撮影）



写真2：高津比咩神社（2021年3月14日撮影）

の役どころで大神輿を船橋市三山の二宮神社へ渡御しており、地域の氏子の協力により、およそ500年続く伝統を守っている。

5.2. 三山七年祭神社

下総三山の七年祭りは、船橋市・習志野市・八千代市・千葉市にまたがる9つの神社が寄り集まって協同して行う、いわゆる寄合祭りである。丑年と未年に実施され、数えて7年目に祝祭が行われることから、地元では「七年祭り」と呼称されている。七年祭りは丑年と未年に行われ、大きく「小祭（湯立祭）」と「大祭」に区分される。さらに「大祭」は「安産御礼大祭」と「磯出祭」に区分されている。安産御礼大祭においては、親族縁者の役割を付与された以下の9社が三山神揃場に勢揃いし、定められた順序によって三山旧道を二宮神社に向かって参向する。

- ①二宮神社〈父・夫〉（船橋市三山），②子安神社〈母・妻〉（千葉市花見川区畑町），③子守神社〈子守〉（千葉市花見川区幕張町），④三代王神社〈産婆〉（千葉市花見川区武石町），⑤菊田神社〈伯父〉（習志野市津田沼），⑥大原大宮神社〈叔母〉（習志野市実柵），⑦大和田時平神社〈長男〉（八千代市大和田），⑧高津比咩神社〈姫君〉（八千代市高津），⑨八王子神社〈末息子〉（船橋市古和釜町）。

古来、安寧に子供を産み育てるといふことは、人々、そして地域社会にとって切なる願いであった。それゆえに、日本全国に安全安心な出産・安産と健やかな子育てを祈念する神社は多数存在している。子安神社は安産・子育ての神を祭神として祀る神社である。また、子守神社は、日本各地に存在する神社であり、子供の守護神としての「子守神」を祀る神社である。「子守神」は氏神とされ、氏神社の境内に末社として祀られている。籠守神社、子護神社などとも記される。川尻（2008：241-242）によると、出産とは多くの場合、「死をかけた出産」であり、出産に際しては数々の呪術がなされた。当時は、坐産であり、産婆役の女性が後ろから抱きかかえるように介助したが、その多くは巫女であった。平安時代において、験者や陰陽師の治療は、加持祈祷や祭祀により神仏や霊鬼を制御することによって成り立つものと理解されていた（繁田1995：77）。千葉氏の一族である馬加康胤（まくわりやすたね）の奥方の出産にまつわる伝承によると、15世紀後半、馬加まくわり（現在の千葉市幕張）を本拠



図1：三山七年祭神社パラログラム

(©Googleマップによって作図)

とした康胤の奥方は、臨月を過ぎてても出産の気配がなかった。それを案じた康胤は二宮神社の神職に祈祷を命じ、浜辺で祭事を行ったところ、無事に男子を出産したという。以後、康胤は安産御礼の祭りを行うようになった（習志野市ホームページ，2022）。

二宮神社、菊田神社、大和田時平神社、高津比咩神社、八王子神社の藤原時平系と大宮大原神社、三代王神社、子安神社、子守神社の安産・子育て系神社との2系列に分かれる。これらの9社に加え昆陽神社の本殿の位置を地図上でプロットしたものが図1である。最南端には昆陽神社が位置するが、昆陽神社は子守神社の南東約500メートルに、三代王神社の南西約600メートルの場所に位置しており、菊田神社と子守神社を結ぶ線分と高津比咩神社と子安神社を結ぶ線分が交差する地点に鎮座している。

5.3. 三山七年祭神社パラログラム（平行四辺形）

図1に示されるように、これらの神社の外縁部を結ぶ線分は、パラログラム（平行四辺形）の幾何学的な配置を成していることが見いだされた。そして、このパラログラムの上部（北側）は藤原時平系神社、下部（南側）は安産・子育て系神社という性格を異にする神社群から成り立っている。これらのことから、「七年祭り」とは、藤原時平を祭神とする先祖崇拜と安産・子育て信仰とを習合させて、より一般的な地域発展や地域安全という高次の目的に昇華させた祝祭となったと考えられる。

下総七年祭りが現在のようになつたのがいつ頃なのかを特定する記録は現存しない。しかし、

7年毎の丑年と未年に行われるようになったのは、享保12年（1727年）であり、同年の頃から現在に伝わる下総七年祭りの原初的形態が見られたという説が有力である。享保12年といえば江戸時代中期であり、天神信仰が全国的に隆盛を極め、後世の説話や芸能では藤原時平は讒臣・極悪人として描かれた時代と重なる。

5.4. 八千代時平系神社群トライアングル

時平神社四社は、現在の千葉県八千代市に鎮座する4つの時平神社の総称である。時平の名が神社の名称として冠せられ、しかも複数の時平神社が狭隘な一地域に集中するのは、全国でもこの八千代市のこの地域のみである。その意味で、この地域は極めて特異である。

大和田時平神社は慶長15年（1610年）創建。萱田時平神社は元和元年（1615年）創建。小板橋時平神社は、昭和16年（1941年）創建。これらに加え萱田下時平神社（創建年不明）が存在する。これらの4社は、江戸時代の初期から昭和の時代にかけて建立されている。道真の天神信仰が盛んだった江戸初期は、道真の怨霊の威力が増したと広く民衆に受けとめられた。それに対応・対抗するかのよう、時平圏の民衆（氏子）は、前述の時平系神社の菊田神社や二宮神社から時平の分霊を勧請したものと推察されよう。時平神社の氏子にとって、「時平悪役説」は、道真の怨霊鎮魂に加え、道真を美化、正当化するために脚色された物語や説話のなかのフィクションな物語なのである。

萱田下時平神社、小板橋時平神社、高津比咩神社の3社は三角形の形状を構成していて、その三角形の内側のほぼ中心に大和田時平神社が、萱田



図2：八千代時平系神社群トライアングル
(©Googleマップによって作図)

下時平神社、小板橋時平神社を結ぶ線分のわずかに東側約80メートルの場所に萱田時平神社が位置している。これらを八千代時平系神社群トライアングルと呼ぼう。

5.5. 下総台地の天満宮

下総台地には多数の天満宮が祭られている。神社の位置は呪術的な意図のもと、直線上に配置されることがある。今回の調査によって、西印旛沼の南側、新川が蛇行する一帯で北西と東南に連なる天満宮の2本の線分の上に天満宮が配置されていることが明らかになった。これらを天満宮Aライン、天満宮Bラインと呼ぼう。前述した八千代時平系神社群トライアングルと天満宮Aライン、天満宮Bラインとの位置関係は図3のようになる。



写真3：大和田時平神社（2021年3月11日撮影）



図3：天満宮ラインA、Bと八千代時平系神社群
トライアングル
(©Googleマップによって作図)

あたかも東北の鬼門の方角に展開される2本の天満宮ラインに対して鋭利な矛先を向けて、対抗、拮抗するかのよう、八千代時平系神社群トライアングルは楔形の形象を大地に刻印している。さらに、前述した三山七年祭神社群パラレログラム、八千代時平系神社群トライアングル、天満宮A、Bラインの位置関係を地図上に落とし込んで得た諸神社の配置図が図4である。すなわち、下総台地地域を中心として三山七年祭りを構成する神社群は、パラレログラムの形象を構成し、その東端に位置する高津比咩神社を起点にして、八千代時平系神社群トライアングルが形作られている。八千代時平系神社群トライアングルの北端に位置する萱田下時平神社から見て鬼門（東北）の方向には、天満宮Bラインと、天満宮Aラインの2本に渡り天満宮が配置されている。



図4：三山七年祭神社群パラレログラム、八千代時平系神社群トライアングル、天満宮A、Bラインの位置関係 (©Googleマップによって作図)

さらに、天満宮Aラインの西北端に位置する白井天満宮（白井市）と東南に位置する寺崎天満宮（佐倉市寺崎）と、葛飾天満宮（市川市八幡、葛飾神社境内に所在）、千葉天神（千葉市中央区、妙見本宮千葉神社境内に所在）とを線分で結ぶと、図5のような四角形の形状を表象する。この四角形を下総道真信仰系レクタングル（四角形）と呼ぼう。

白井天満宮（創建年不明）と千葉神社境内に鎮座する千葉天神（1182年創建）を結ぶ線分と菅原神社（1157年創建）と葛飾神社（889年～898年創建）内に鎮座する葛飾天満宮（創建年不明）を結ぶ線分が

交差するポイントに高津比咩神社が位置している。

これはまったくの偶然なのだろうか。前述した「高津観音堂本尊縁起」は、延喜9年（909年）の藤原時平の没後、時平の第五息女高津姫が高津の地に移り住み、当地で生涯を終えて後、高津姫として祀られ、のちの時代に高津比咩神社となったことを伝えている。つまり、高津比咩神社の神社としての記録上の創建年は、明応元年（1492年）となつてはいるものの、近在の氏子が高津姫を祀り始めたのは、10世紀の頃と推定される。しかるに、下総道真信仰系レクタングルを構成する白井天満宮（創建年不明）以外の3社は、10世紀に淵源する高津比咩神社よりも後の時代に創建されたものであると推測される。これらのことから、下総道真信仰系レクタングルの対角線が高津比咩神社で交差するのは、道真を尊崇する勢力による藤原時平の子孫に対する呪術的な意図のもとなされたものであると推定される。



図5：下総三山七年祭神社、藤原時平系神社、天満宮を中心とする下総台地に刻印された神社の呪術的配置形象 (©Googleマップによって作図)

5.6. 水害リスクとの関係

図5に示されるように、道真信仰系レクタングル、つまり、菅原道真を祭神とする天満宮や天神に囲まれる地域のなかに、本研究で明らかにした三山七年祭神社パラレログラムと八千代時平系神社群トライアングルが包摂されるようにして表象されているのである。

さて、香取海（かとりうみ）は、古代の関東平野東部に太平洋から湾入し、香取神宮の南西方向に広がっていた内海である。香取海は、江戸時代前まで下総・常陸国境あたり一帯に広がり、北の常陸国信

太郡と南の下総国香取郡・印波郡とを隔て、鬼怒川、小貝川、常陸川が注ぎこんでいた。

利根川の東遷事業は、元和7年(1621年)から徳川幕府によって着手されたとされているが、その前後の時代は、毎年のように深刻な水害が現在の印旛沼一帯を襲っていた。現在の印旛沼の湖面の標高は2メートル。印旛沼及び周辺で頻繁に起こった洪水(水害)には2種類ある。利根川の氾濫によって発生する水害は、「外水」といわれ、印旛沼に流入する河川の増水によって発生する水害は「内水」といわれる。山田ら(1993)によると、佐倉市馬渡に伝えられる伝承によると、印旛沼から鹿島川を10キロメートル遡った地域でも毎年のように水害で収穫が皆無となり、四街道市物井には、水害のために収穫がなくて年貢を免引してもらった「水損引」という古文書が多数残っている。今日、八千代市が策定したハザードマップに基づく水害リスクアセスメントでは、利根川流域の72時間総雨量491mmの降雨(水防法の規定により指定された想定最大規模の降雨)が発生し、利根川が氾濫した場合に想定される浸水区域及び水深を最大5メートルと想定している。

以上のことから、印旛沼水系と東京湾において5メートル水位が上昇した場合、水害がどの範囲にまで及ぶのかを、floodmapsを用いて推定したものが図6である。5メートル相当の水位上昇によって、北印旛沼、西印旛沼、新川、神崎川、鹿島川、桑納川流域は深刻な水害被害に遭うことが予測される。また、葛飾天満宮と千葉天神を結び、東京湾を西北から南東に走るラインは、5メートル水位が上昇する場合の浸水線とおおむね一致した。

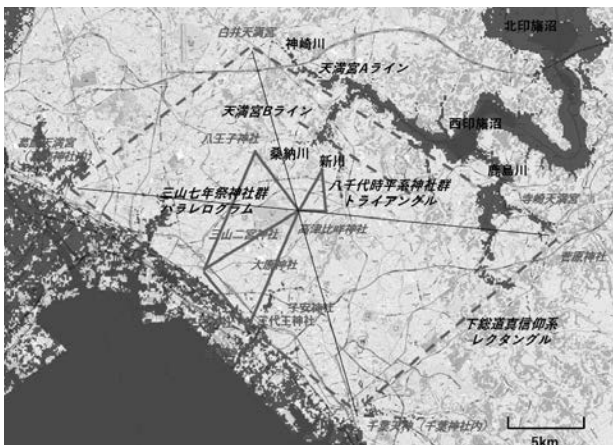


図5：現状から5メートル水面上昇した際の下総地域地形と水位の変化 (©floodmapsにて作図)

5.7. 考察の総合

以上の下総台地に配置された神社の配置形象に込められた呪術的な目的ないしは意図を総合すると、以下ようになる。

5.7.1. 異界としての八千代市時平系神社群

三山七年祭神社パラログラムの北側を構成する二宮神社、菊田神社、八王子神社、高津比咩神社は、藤原時平を祭神とする神社群である。萱田下時平神社、小板橋時平神社、高津比咩神社の3社は八千代時平系神社群トライアングルを構成していて、その三角形の内側のほぼ中心に大和田時平神社そしてやや離れて萱田時平神社が位置している。これら藤原時平を祭神とする神社群が、菅原道真を信仰する立場、後世に生まれて流布されてきた「時平悪人説」を信奉する勢力から見れば、八千代市時平系神社群は、いわば邪神を祀る異界である。

5.7.2. アンチノミーかつアンビバレントな時平と道真の関係性

この邪神異界を呪術的に封じようとした道真信仰＝天満宮信仰の配置が、本稿で見た天満宮Aラインと天満宮Bラインである。さらに、天満宮Aラインと妙見本宮千葉神社境内に所在する千葉天神、寺崎天満宮(佐倉市寺崎)と葛飾天満宮(市川市)を結ぶ下総道真信仰系レクタングルは、三山七年祭神社群パラログラムと八千代時平系神社群トライアングルを取り囲んでいる。この形象は、道真信仰を主とする勢力から見れば道真が怨霊と化した契機をつくった時平信仰を封じ込める、ある種の結界を成していると解釈できるだろう。それと同時に、マイノリティ集団である時平を崇め、時平の神威を尊崇する氏子から見れば、下総台地を舞台にとり囲むようにして圧迫する多数派の道真信仰に対する、暗黙的な抵抗の象徴であろう。

しかしながら、拮抗・緊張関係のみが、道真と時平の関係性を特徴づけるわけではない。時平なかりせば、本稿の「はじめに」でレビューした言説に見られるような道真の怨霊も、天神信仰も、天満宮信仰もなかったことになる。換言すれば、道真と時平は、拮抗・緊張的關係であると同時に、地域安全、鎮護国家という呪術的命題のもとでは共存・相互依存の關係でもある。藤原時平と菅原道真の呪術的関係性は、拮抗・緊張的關係であり、かつ共存・相互依存の關係でもあるというアンチノミー(二律背反)

的かつアンビバレント（両義的）なものである。

7.5.3. 八千代時平系神社群は水害リスクを黙示

注目すべきは、天満宮Aラインは印旛沼に注ぎ込む神崎川、新川、鹿島川河口の南側に広がる高台の上にはほぼ一直線上に配置されているということである。天満宮Bラインは、桑納川が新川に注ぎ込む合流点、手繰川、鹿島川の上流地点を天満宮Aラインとほぼ平行しているという点である。図6に示したように、頻繁にこの地域を襲ってきた水害の危険性を示しているものと推察される。天満宮Aラインの付近、とくに天満宮Aラインの北側は水位上昇の被害が深刻な地域であり、水害被害のリスクを黙示している。現在の八千代市に位置する藤原時平神社4社は、1610年から1941年に渡って創建された。いずれも、鎮座する場所は、標高15メートルから24メートルであり、このあたりの地域の高台に位置している。八千代時平系神社群トライアングルの東側の辺は、新川の流れに沿う形となっていて、東側の辺の西側は高台となっている。これらのことから、八千代時平系神社群トライアングルは、水位上昇の被害リスクが及びにくい安全ゾーンを黙示しているといえよう。服部・二井（2012）は、洪水常襲地における神社の立地特性として、浸水頻度の高い集落では、川と集落との間に神社を設置する傾向を指摘したが、本研究が対象とした地域の神社の配置にも、このような傾向がみられる。

7.5.4. 三山七年祭神社群パラレログラムと水害リスク

三山七年祭神社群パラレログラムはどうか。最も海側に位置する菊田神社（標高6.4メートル）、幕張総鎮守子守神社（標高6.1メートル）は、水位上昇の被害リスクが及び易いものの、検見川流域の標高が低い地帯以外の三山七年祭神社群パラレログラム内側は、水位上昇の被害リスクが及びにくい地域であるといえよう。最北部の八王子神社（標高22.6メートル）は、桑納上流に木戸川が合流する地点の高台に位置している。両川は標高が低い湿地帯を流れているため、あたり一帯の水位上昇に伴う災害リスクは高い。以上、総じていえば、三山七年祭神社群パラレログラム内側は、内部に向かうほど、標高が高くなっていて水位上昇に伴う災害リスクは低くなるといえる。

6. 結 論

6.1. 予備的検討の結論

令和の世に生きて下総台地や近隣の地域で生活を営むわたしたちにとって、これらの神社群の呪術的な位置関係の表象は、普段意識することは極めて稀有であろう。「下総七年祭り」とは、藤原時平を核とする先祖崇拜と安産・子育て信仰とを習合させて、より一般的な地域発展や地域安全という高次の目的に昇華させた祝祭である。八千代市に鎮座する4つの時平神社は、時平を核とする先祖崇拜と地域安全を目的とする神社群である。菅原道真を媒介とする呪術ないしは信仰は、菅原道真を怨霊から徐々に地域安全、国家鎮護のための守護神、学問の神様へと転換されてきた。

以上の呪術的意図は、①三山七年祭神社パラレログラム、②八千代時平系神社群トライアングル、③天満宮ラインA、B、④下総道真信仰系レクタングルという神社の呪術的配置形象として空間的に構成されている。これらを要するに、下総台地に配置されたこれらの神社の呪術的配置形象は、藤原時平と菅原道真の拮抗・緊張関係と共存的な相互依存関係を前景にしつつも、より本質的には、この地域社会に根差した水害リスクの有り様を暗黙的に示唆している可能性がある。

6.2. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、個々個別の神社の間に潜在する関係性、つまり配置形象に注目し、それらの歴史的由来と呪術的意味を検討することによって、下総台地には藤原時平系神社、下総三山七年祭神社、天満宮を中心として、神社の呪術的配置形象が下総台地に暗黙的に刻印されていることを示した。ただし、本論文は予備的検討であり、関連する神社の呪術的な配置形象をある程度明らかにすることはできたが、それを水害リスクと関連させた図6はあくまでも予測的な推定の域に留まる。

二宮神社は、式内社の寒川神社に比定され、当初の祭神は寒川神であったとされている。しかしながら、本研究は、現存している神社の位置関係に主眼を置いたため、寒川神が時平神に変遷する過程までもも解明することはできず、寒川神信仰と時平信仰の関係性まで遡及して考察することが出来なかった。また、本研究は、昭和以降に実施されてきた下

総七年祭を対象としているが、下総七年祭は、時代の推移によって変化してきている。たとえば、叔父、叔母、姫君などの親族呼称は大正期にも定まっておらず、これらの呼称は昭和の時代に命名されたとされる。よって、本研究は、現在に残っている関連神社の位置関係を考察したものであり、各神社の歴史の変遷を史実によって網羅的に分析するものではなかった。正確な史実を伝える史料の発掘は、今後の課題としたい。以上のように、今回の検討でカバーできなかった史料等を精査することによって、この地域内において実際に発生した水害水位を特定して、さらに精緻な検討を加えたい。

引用文献

- James Frazer, George W. Stocking, 1998, *The Golden Bough: Abridged Edition*. Penguin Classics. J.G. フレイザー, 2012, 『金枝篇：呪術と宗教の研究〈6〉穀物と野獣の霊(上)』, 国書刊行会。
- 上田紀行, 2010, 『スリランカの悪魔祓い』, 講談社文庫。
- 湯島天神ホームページ <https://www.yushimatenjin.or.jp/pc/hatumoude/hatumoude.htm> 閲覧2022年4月17日
- 滝川幸司, 2019, 『菅原道真：学者政治家の栄光と没落』, 中央公論新社。
- 山田雄司, 2014, 『怨霊とは何か：菅原道真・平将門・崇徳院』, 中公新書。
- 竹居明男, 2002, 天神信仰の歴史—怨霊から「天満自在天神」へ(特集学問の神様・菅原道真没後1100年)。国文学67(4), 6-22。
- 南里みち子, 1991, 時平像の形成, 語文研究, 54, 九州大学国語国文学会。
- 笠井昌昭, 1964, 北野天神縁起説話の成立過程, 同志社大学人文科学研究紀要第7巻, 同志社大学人文科学研究所。
- 藤田直子・熊谷洋一, 2007, GIS解析による都市における神社・寺院・公園の立地地点の分布形態の差異に関する研究, 景観生態学12(1), 9-21, 2007。
- 東京都神社庁編, 1986, 東京都神社名鑑, p662東京都神社庁, 東京。
- 上田篤・中村良夫・樋口忠彦, 2005, 日本人はどのように国土をつくったか—地文学事始, 294, 学芸出版社, 東京。
- 鎌田東二, 2000, 『神道とは何か』, 219pp, PHP研究所, 京都。
- 服部周平, 二井昭佳, 2012, 洪水常襲地における神社立地に関する基礎的研究—黒部川扇状地・富山県入善町を対象として—, 土木学会景観・デザイン研究講演集, No. 8, pp.241-248。
- 尾崎信, 金井雄太, 2012, 三陸地方沿岸における神社立地の特徴—津波常襲地帯の集住地に関する一考察—, 土木学会景観・デザイン研究講演集, No. 8, pp.227-234。
- 高世仁, 吉田和史, 熊谷航, 2012, 『神社は警告する古代から伝わる津波のメッセージ』講談社。
- 鈴木比奈子, 内山庄一郎, 堀田弥生, 2012, 東日本大震災における神社の津波被害現地調査報告, 日本災害情報学会, 第14回研究発表大会予稿集, pp.122-125。
- 高田知紀, 梅津喜美夫, 桑子敏雄, 2012, 東日本大震災の津波被害における神社の祭神とその空間的配置に関する研究, 土木学会論文集F6 (安全問題), 68巻2号, pp.167~174。
- 菊田神社ホームページ <http://www.kikuta-jinja.jp/yuisho.html> 2022年4月21日閲覧。
- 習志野市ホームページ, 下総三山の七年祭り(千葉県指定無形民俗文化財)。 <https://www.city.narashino.lg.jp/citysales/kanko/bunkahistory/narashinosinobunkazai/sichinenmatsuri.html> 2022年4月22日閲覧。
- 文久3年(1863)に記された『高津観音堂本尊縁起』による。時の住職の氏名は不肖。
- 八王子神社ホームページの記述による。 <https://hachioji-jinja.com/about/> 閲覧：2022年4月30日。
- 川尻秋生, 2008, 『揺れ動く貴族社会』, 日本の歴史, 平安時代, 小学館。
- 繁田信一, 1995, 平安貴族社会における医療と呪術：医療人類学的研究の成果を手掛りとして, 宗教と社会1(0), 77-98。
- 習志野市ホームページ, 下総三山の七年祭り(千葉県指定無形民俗文化財)。 <https://www.city.narashino.lg.jp/citysales/kanko/bunkahistory/narashinosinobunkazai/sichinenmatsuri.html> 閲覧2022年4月22日
- 山田安喜, 1993, 印旛沼・手賀沼水環境への提言, 古今書院。